

[道 徳]

好ましい人間関係を結ぶ力の育成

- 思いやり育成プログラム (VLF:Voices of Love and Freedom) を適用した道徳授業を通して -

伊佐 貢一*

1 研究の目的

好ましい関係とは、「互いの考えを尊重し合い、認め合える人間関係」である。最近の子ども達は、相手の気持ちを考えないで自分本位の言動とることが多くなった。私は、当校に5年前(平成12年度)に赴任した。当時の子どもの様子で最も気になったのは、友達に平気で投げ掛ける「何それ」「へたくそ」「バカ」などの言葉であった。言われた相手がどのような気持ちになるか、言葉を投げ掛けた子どもに丁寧に指導してようやく自分の言葉の意味が分かることが多かった。このような事象に対して、一つ一つ後追いで対応していても状況は改善されないと考え、予防開発的な視点に立って全校体制でソーシャルスキル教育に取り組んだ。

ソーシャルスキル教育は、子ども達に好ましい人間関係を結ぶための基礎となる知識を学ばせ、技能を身に付けさせることをねらいとしている。指導内容としては、年間8セッションのソーシャルスキルトレーニングを行う場(学びの場)を設け、学校生活全体で定着化(般化)させていくものである。向上したソーシャルスキルは、「向社会的スキル」と「社交性スキル」であり、「負の社会性スキル」は抑制することができた。しかし、「主張性スキル」には変化が見られなかった。これらのプログラムを実施して5年目を迎えた子ども達は、対人関係に必要な基礎的なスキルを学習しているので、友達を傷付けるような言動をとることが少なく温かい雰囲気が醸し出されている。

しかし、相手を傷付けなければ、好ましい人間関係が築けるかというところではない。自分の考えと相手の考えが違うとき、相手を傷つけないようにすることばかり考えていては自分を大切にしていないことになる。対人葛藤場面で自他を大切にしながら、主体的に問題を解決していこうとする力を育てることが必要である。そのために、「思いやり育成プログラムVLF (Voices of Love and Freedom)」(以下:VLF)を適用した道徳授業を実施することにした。VLFの「思いやり」とは、自己犠牲を伴う思いやりではなく、自分を生かし、他者を生かし、違う他者を認めながら様々な対人葛藤を解決していく力を養うことを目的としている。他人の視点を理解すること、他人に自分のことを理解してもらうことが基本となっている。これらを役割取得能力と呼ぶ。すなわち、役割取得能力を高めることがVLFプログラムの理論的基盤である。ソーシャルスキル教育を全校体制で行っている当校で、VLFを適用した道徳授業を行うことを通して「好ましい人間関係を結ぶ力」を育成することができると考えた。

2 研究の方法

研究の全体構想は、【図1】に示す通りである。実験群と統制群にソーシャルスキルトレーニングを年間8セッション行い、セッションからセッションの間に学習したスキルの般化を促す指導をする。実験群にのみ、VLFを適用した道徳授業を2学期から3学期にかけて3回実施する。

- (1) 被験者: 実験群は4年生14人、統制群は5年生14人、6年生24人である。
- (2) 時期: 2003年4月~2004年3月にかけて実施した。
- (3) 材料
ア VLFを適用した道徳授業(1回4時間構成)を、9月、11月、翌年3月に実験群に実施する。
イ ソーシャル・スキル教育プログラムを年間8セッション、実験群と統制群に実施する。
- (4) 測定尺度
ア ソーシャルスキル尺度(河村;2001): 実験群と統制群ともに介入の前後に調査する。
その他、実験群の変化を詳細に調べるために、実験群については次の二つの調査を実施した。
イ 役割取得能力テスト(Schultz and Selman;1998): 実験群のみ介入の前後に調査する。
ウ Q-U学級生活満足度尺度(河村;2000): 実験群のみ介入の前後に調査する。

* 小千谷市立吉谷小学校

【図1】研究の全体構想図

	調 査	S S T	V L F
4月 5月 6月 7月	プリテスト① ・Q-U 学級生活満足度尺度 ・ソーシャルスキル尺度	SST ①あいさつ SST ②上手な聴き方 SST ③上手な質問の仕方 SST ④やさしいたのみ方	
9月 10月 11月 12月	プリテスト② ・役割取得能力テスト	SST ⑤温かいメッセージ SST ⑥気持ちを分かち合う	VLF ①「相手のことを考えて」 ～子ねこのネネ～ VLF ②「みんな仲間」 ～にじいろのさかな～
1月 2月 3月	ポストテスト ・Q-U 学級生活満足度尺度 ・役割取得能力テスト ・ソーシャルスキル尺度	STT ⑦自分を守る STT ⑧不平不満の言い方	VLF ③「仲間はずれ」 ～にじいろのさかなしましまを たすける～

VLFは、アメリカのハーバード大学セルマン (Selman, R. L.) が提唱し、1996年よりボストンの公立幼稚園から高校までを通して採用されている。日本に紹介した法政大学の渡辺 (2001) は、次のように述べている。VLFは、思いやりの心を育成するとともに、問題行動を予防するために開発されたプログラムであり、特徴としては自分の気持ちや考えを主張することに基盤がおかれている。子ども自身が話す、聴く、読む、書く、動く、解決するといった能動的な授業をつくる上で、このプログラムは効果的である。また、世界中の文化と言語に根ざした物語を通して読み書きの能力を発達させながら人間関係のスキルを発達させることを目的としている。

3 実践の様相

(1) VLF思いやり育成プログラムの実践

VLFは、【図2】に示すような4つのプロセスから成り立っている。

【図2】VLFプログラム（役割取得能力を高める4つのステップ）

ステップ	活 動	内 容
ステップ1	結びつき	教師は、道徳的課題にかかわる個人的な体験談を話す。教師が、自己開示することによって、教師と子どものリレーションを築く。また、教師が自分の体験談を表現力豊かに話すことによって、聞いている子どもは自分の気持ちを素直に表現する。
ステップ2	話し合い	教師の話聞いて、思ったことや自分ならどうするのかをパートナーインタビューする。また、教材として扱う物語の途中、葛藤場面で立ち止まり、一人一人が意見を出せるようパートナーインタビューなどを行う。
ステップ3	実 践	葛藤場面を解決するための行動を考えさせ、実際に行動できるように導く。ロールプレイ（葛藤場面の役割演技）やソーシャル・スキル・トレーニングを用いる。
ステップ4	表 現	自分の思いを日記・手紙・物語の続きとして表す。

このプロセスに沿って、3回のVLFを適用した授業を【図3】のように構成した。各ステップの実践は、次の通りである。

ア ステップ1（結びつき）

1回目、教師の体験について話をした後、似たような経験がないか振り返らせた。ほとんど発言がなかったので、友達とのことで困っていることなどをパートナーインタビューで引き出した。自分を振り返ることやパートナーインタビューの手法に慣れていないのであまり活発な意見交換にならなかった。

パートナーインタビューに慣れさせるために、朝の会や帰りの会などで時々パートナーインタビューを行い、相手の思いを上手に聴き出す練習をしたところ、2回目、3回目については活発な意見交換がなされた。特に2回目は、教師

の体験談が子どもの経験していることと似ていたこともあり、主体的に自分のことを語る子が多かった。日常接している担任の自己開示が、子ども自身の自分も話してみようという気持ちにつながり、ステップ1の「結びつき」ができた。

また、教師の話し方が子どもが話す時のモデリングになり、教師の話し方をまねて話すことができた。しかし、子ども達が自分達の実生活をそのまま語ることもあり、クラスの誰の言動かが分かってしまう心配があったので配慮した。このようなことを避ける意味でステップ2では、自分達の生活と直接関係のない絵本など物語を使い、葛藤場面を用意した。

【図3】3回のVLF授業の流れ

	相手のことを考えたい 教材：「子ねこのネネ」	みんな仲間 教材：「にじいろのさかな」	仲間はずれ 教材：にじいろの さかな～しましまをたすける～
ねらい	相手の立場に立って考えることができるようにする。	だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って行動しようとする。	仲間はずれをしてしまう気持ちを考え、仲間はずれをしないようにする気持ちを育てる。
① 結びつき	教師が体験を話す 入院した友達が喜ぶと思って持っていった野球のボールが、かえって相手をつらくさせてしまった経験。	教師が体験を話す 帰ったら一緒に遊ぼうと友達を誘ったら用があるからと断られた。一人で公園へ行ってみると、その友達は他の友達と遊んでいた経験。	教師が体験を話す 鬼ごっこをしていて、私が鬼になったらみんなが同じ方向へ逃げて行っただけで仲間はずれにされたような気持ちになった経験。
② 話し合い	・物語の最後を隠し教師が読む。2人1組の役割読みをする。 ・自分が主人公なら、誕生日の友だちに何をプレゼントするか考える。	・ひとりぼっちになったにじうおの気持ちを考える。 ・きらきらうろこをあげたにじうおの気持ちを考える。	・みんな遊びに行ってしまった時のにじうおの気持ちを考える。 ・危ないところにいるしましまに気付いた時のにじうおの気持ちを考える。
③ 実践	・登場人物になって劇をする。 ・友達のロールプレイを見て気付いたことを発表する。	・にじうおがうろこをあげる場面で、自分ならどうするか考え、ロールプレイをする。友達のロールプレイを見て自分の感想を発表する。	・しましまを助けた後、にじうおはしましまになんと言ったか考え、ロールプレイを行う。
④ 表現	・プレゼントに添える手紙を書くことで、プレゼントを選んだ自分の気持ちを相手に伝える。	・にじうおへ手紙を書くことを通して、仲間の大切さについて考えさせる。	・にじうおへ手紙を書くことを通して、仲間はずれについて考えさせる。

イ ステップ2（話し合い）

物語を利用することで、自分の体験談の時より安心して活発にパートナーインタビューを行っていた。回を重ねる毎に、インタビューする側は「なぜ、そう思うのですか。」「それは、どうしてですか。」など相手の考えをうまく引き出すことができるようになってきた。インタビューを受ける側は、【資料1】に示すように相手の質問で自分の考えを確認したり深く追求したりすることができた。VLFのVは「Voices」のVであり、主体性を意味する。パートナーインタビューは、全員が自分の主体性を発揮することができる手法であり、単なるインタビュー遊びではなく一人一人の主体性を育てる有効な活動であると思われた。

また、友達のパートナーインタビューを見ることで、いろいろな感じ方があることに気付く子も多かった。S男は、ステップ2で、「半分のうろこをあげる。」と述べた。「自分のうろこの枚数の半分をだれにあげるのか。」というクラスの仲間からの質問を受け、葛藤しながらも自分の思いを貫いた。最初にS男の話を聞いたM男は、「ぼくは、話し合いを聞いて、S男の考えに賛成するようになりました。」と述べた。しかし、クラスの話し合いを聞いて最後に、「やはり考えが変わりました。」と述べるなど、友達の意見を聞きながら真剣に自分を見つめ、葛藤場面で自分はどうするかを考えていた。

【資料1】ステップ2のパートナーインタビュー

T：青い小さなさかなにうろこをあげたとき不思議な気持ちでしたと言っていますがどんな気持ちでしょう。
M：うれしい気持ちになったと思います。
T：それは、どうしてですか。
M：それは、青い小さいさかなが「ありがとう」と、言ってくれたからです。
T：どうして、「ありがとう。」と言われることがふしぎな気持ちになるのですか。
M：にじうおは、今まで「ありがとう」と言われたことがなかったからです。
T：分かりました。ありがとうございました。

ウ ステップ3 (実践)

ステップ3の「実践」は、ステップ2の葛藤場面の話し合いで「気付いたこと」を「行動にうつす」場である。ここで、当校が行っているソーシャルスキル教育を生かすことができる。

【資料2】は、自分の大切なものはあげられないという気持ちから、相手の要求を断る児童の姿であり、ソーシャルスキルトレーニングの成果が現れている。うろこをあげて、友達になろうとする子が多い中で、自分の思いと相手の思いを大切にしながら主張的な言い方で相手の要求を断り、さらに両者による関係をつくりだそうとしていた。ステップ2の話し合いを生かしたステップ3の実践こそ、ソーシャルスキルトレーニングの学びを主体的な判断で生かす場面である。ステップ3を年間のソーシャルスキル教育と関連付けて構成することで、ソーシャルスキル教育とVLFが補完されると考えた。

エ ステップ4 (表現)

主人公に手紙を書くことを通して相手の視点を取得するよう構成した。1回目は、プレゼントを贈る相手の気持ちを考えて、プレゼントに添えるメッセージを考えた。2回目は、うろこという物をあげなければ仲良くなれないというところにこだわっている子もいたが、約半数の子がうろこをあげたことで喜びを共有できたことが大切だと気付いたことを主人公に伝えている。【資料3】の子どもの手紙では、物よりも友だちが大切であり、自分がこだわっていた物をあげることですなおな気持ちなれた主人公の役割を取得している。3回目では、ほとんどの子が仲間はずれをしたことを反省し、仲良くしていこうとする気持ちを表現していた。実践を通して感じたことをもう一度振り返り、相手の視点を意識しながら文章に書くことで「役割取得能力」が高められると考えた。

(2) ソーシャルスキルトレーニングの実践

実践した内容は、【図4】に示すプログラムである。

【図4】 ソーシャルスキルトレーニングのプログラム

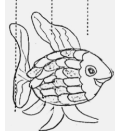
	ね ら い	具体的なスキル
あいさつ	あいさつは、良好な人間関係をつくるための第一歩であることを理解し、進んであいさつすることができるようにする。	①だれにでもあいさつする ②相手の目を見てあいさつする ③元気な声ではっきりとあいさつする
上手な聴き方	人の話を注意して聴くことの大切さを理解し、適切な話の聴き方を身に付ける。	①今していることをやめる ②相手を見る ③うなずき相づちを入れる ☆関係のあるコメントを返す(高学年)
上手な質問の仕方	質問は、新しいことを知るばかりではなく不安の解消や危険の回避になることを理解し、適切な質問の仕方を身に付ける。	①あいさつする ②質問していいか相手の都合を聞く ③質問する ④お礼を言う
仲間への入り方	仲間の入り方や誘い方を理解し、それぞれのスキルを高める。	仲間に入りたい気持ちをはっきりとていねいに伝える
温かいメッセージ	温かいメッセージと冷たいメッセージが相手に与える影響について理解し、温かいあるいは好意的なメッセージの送り方を身に付ける。	①気づかう 「どうしたの」「だいじょうぶ」 ②励ます 「がんばってね」「心配ないよ」 ③ほめる 「すごいね」「上手だね」 ④感謝する 「ありがとう」「助かったよ」
気持ちを分かち合う	共感することの大切さを理解し、相手の感情のとらえ方と適切な対応を身に付ける。	①相手の様子をよく見たり 話を聞いたりして、気持ちを読み取る ②相手の気持ちを考えながら温かいメッセージを送る

【資料2】 2回目ステップ3のロールプレイ

T: お願いだから、そのうろこを1枚ほくにくれよ。
S: ごめんね。このうろこは世界に1つしかないからあげられないんだ。本当にごめんね。
T: どうしてもだめかい。
S: でも、他のさかなももらいにきたら、君にもあげるよ。
T: 全部くれるのかい。
S: 大切なうろこだから、半分だけあげるよ。

【資料3】 2回目ステップ4の手紙

「にじゅうおくんへ
にじゅうおくん、友達ができなくて本当によかたね。わたしは初め、うろこをあげれば友達になつてくれると思、たけど、物をつたつたためだと思。うろこはうろこ、友達は友達だと思、いいます。一番大切なのはすなおな気持ちだと思、いいます。でも、にじゅうおくんは、自分の宝をあげたことで、自分がすなおな気持ちになれたんだと思、いいます。これからも友達も自分も大切に思、いいます。元気ですなおにね。
がんばってね。」



自分を守る	自分を守るためには、他人からの不当な要求を断ることが大切であることを理解し、適切な断り方を身に付ける。	①自分がいやだと思ったことを「ほく、わたしの言い方」(主張的な言い方)で伝える。 ②「オオカミの言い方」「リスの言い方」をしない。
-------	---	--

学習内容の定着を促すよう、般化の工夫を行った。具体的には、学習したソーシャルスキルを教室に掲示する、学級通信を書いて家庭の理解を得る、カードなどを活用して学習したスキルを実行したことを報告させ強化するなどの取組を行った。子ども達は入学以来ソーシャルスキル学習を行っているので、これらの学習については学年が進むにつれて習熟している。

4 結果と考察

(1) ソーシャルスキル尺度について

【資料4】は、ソーシャルスキル尺度「配慮のスキル」得点における事前(4月)事後(3月)の変化をグラフ示したものである。各学年の平均を算出し、時期による一要因被験者内計画による分散分析を行った。「配慮のスキル」については、各学年とも有意差は認められなかった。

「配慮のスキル」の質問項目の「上手だね」などとほめる、「ありがとう」と言う、励ます、相手の話を最後まで聞くなどは、ソーシャルスキル教育プログラムの具体的なスキル内容と一致している。事前の調査で、各学年とも全国平均値よりも値が高いことから、過去4年間のソーシャルスキル教育によって相手に配慮するスキルが身に付いていると考えられる。VLFを適用した道徳授業を実施した4年生に有意差が見られなかったことから、「配慮のスキル」をさらに高める効果はなかったと推測される。学年が進むにつれて得点が下がっていることについては、発達段階的に自己評価が厳しくなることが考えられるが他の要因についても今後の課題として検討していきたい。

【資料5】は、ソーシャルスキル尺度「かかわりスキル」得点における事前事後の変化をグラフに示したものである。各学年の平均を算出し、時期による一要因被験者内計画による分散分析を行った。

「かかわりスキル」については、5年生、6年生に事前事後の有意差は認められなかったが、4年生において事後の得点が事前に比べ有意に高かった

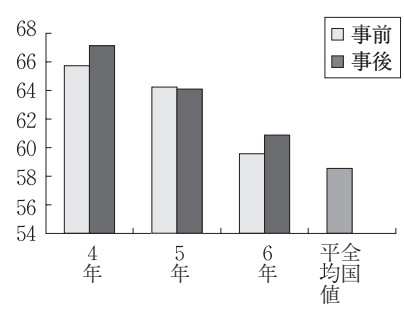
($F_{(1, 13)}=21.23$ $p<0.01$)。このことは、4年生に行ったVLFを適用した道徳授業が「かかわりスキル」得点の向上に影響していると考えられる。「かかわりスキル」の中でも、「他の人に左右されないで、自分の考えで行動していますか。」「みんなと同じくらい話をしていますか。」「相手に聞こえるような声で話をしていますか。」「係の仕事で意見を述べていますか。」などにおける得点が向上している。これらは、パートナーインタビューで自分の考えや思いを語り、自分で判断して行動する活動を通して培われた力であると推測される。

(2) 役割取得能力テストについて

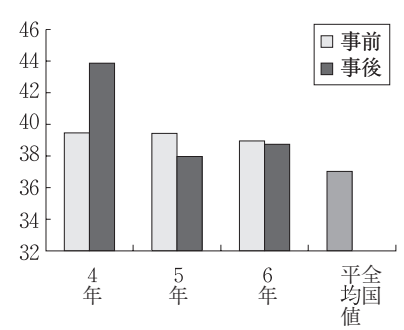
【資料6】は、授業前(9月)に行った役割取得能力テストと同じテストを3回目の授業後(3月)に行った結果である。全体で9つの質問があるが、クラスのほぼ全員がその質問項目における役割取得の発達段階が最も上位の段階であった4項目を除外し、残りの5項目について事前事後の結果を比較した。5つの質問に対して、役割取得の発達段階が上昇した子が18人、下降した子が9人であった。役割取得能力テストの全体的な傾向

として、下位段階の人数が減って上位段階の人数が増えている。このことから子ども達の役割取得能力が高まっていると考えられる。下位段階の子が減っている要因は、パートナーインタビューやロールプレイを行うペアを決める際

【資料4】「配慮のスキル」得点の変化



【資料5】「かかわりスキル」得点の変化



【資料6】役割取得能力の事前・事後の調査結果

	質問1		質問2		質問3		質問4		質問5		合計
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	
役割取得階	0	0	0	0	4	3	0	0	0	0	
	0~1	2	2	2	2	2	1	0	0	0	
	1	1	0	0	0	0	6	4	2	4	
	1~2	6	4	5	4	7	10	3	4	0	
	2	5	8	7	8	3	4	6	3	1	
	2~3	0	0	0	0	0	0	0	9	9	
	上昇	4	4	4	2	4	4	4	4	18	
	下降	1	2	2	2	0	0	4	4	9	

に、事前の調査をもとに役割取得の高い子どもと低い子どもで組むように配慮したことにより、役割取得段階が低い子どもが高い子どもの考えに影響を受けたためであると推測する。

役割取得能力は、①自分と他者を意識すること、②他者の感情や思考などの心の内側を推測すること、③それに基づいて自分の役割行動を決定することである。これらの力が向上することによって、先に述べた「係活動で意見を述べる」「自分の考えで行動する」

「自分の話をする」などの「かわりスキル」の向上に影響を与えたものと思われる。

(3) 学級生活満足度尺度

【資料7】は、事前（4月）と事後（3月）の学級生活満足度尺度の測定結果である。事前において、クラス全員が学級生活満足群にいるものの他群との境界付近にいる子どもも見られ、満足群全体にプロットが広がっていた。事後

においては、境界付近にいた子どもが満足群の内側に入り込み、全体として凝集性が高まっている。

これらは、「かわりスキル」が上昇したことによりクラスの間関係が円滑になり交流が促進されたためであると推測される。互いの交流が促進されるということは、承認得点の向上につながり、プロットが全体に上方に押し上げられるのでクラスの凝集性が高まったと考える。

5 まとめ

VLFは、「思いやり」の力を「役割取得能力」とし、それを育てる4段階のプロセスを明らかにしている点で取り組みやすい。また、「結びつき」「話し合い」「実践」「ふりかえり」の4つのプロセスが役割取得能力の育成に重要であることを実践を通して実感した。役割取得能力の育成は、好ましい関係（互いの考えを尊重し合い、認め合える人間関係）を結ぶ力の育成につながる。そのために、VLFを適用した道徳授業で次の3つの力を育成することが大切である。

- ①自分の考えや気持ちを大切に、それを人に伝える力を育てる必要がある。自分を語ることに慣れていない子ども達に授業の中で、もっともっと自分の考えを自由に語ろうと呼び掛けてきた。VLFのVはVoicesのVであり自分の気持ちや考えを主張することである。ソーシャルスキル教育で、相手に配慮する力が付いてきた当校の子ども達も、相手に配慮しながら自分の考えを主張していく力を付けていくためにVLFの適用が有効であることが今回の取組で明らかにされた。
- ②相手の気持ちに気付く力を育てる必要がある。これは、パートナーにインタビューする活動、友達のパートナーインタビューやロールプレイを見る活動などを通して育成されると考える。また、物語の主人公の気持ちを考える、主人公の気持ちを考えているクラスの友達の気持ちを理解するなど、いろいろな「立場」が授業の中に存在することを指導者自身が自覚して「役割取得能力」育成のために活用することが大切である。
- ③自他の気持ちが違った場合、よりよく問題を解決していく力を育てる必要がある。ソーシャルスキル教育で「行動して気付き」をもった学習経験を、VLFを適用した道徳授業で深化統合し、葛藤場面で相手に配慮しながら自分の行動を決定していくことが大切である。すなわち、「気付いて行動する」力の育成を目指す。

自分の気持ちを相手に伝え、相手の気持ちを理解し、双方の意見が違った場合に話し合っよりよく解決しようとする能力の育成を通して、好ましい人間関係を結ぶ力を育てよう支援していきたい。

引用参考文献

伊佐貢一 2002 小学校におけるソーシャル・スキル教育プログラムの開発 上越教育大学実践論文集 13集, 101-106

渡辺弥生 編集 2001 VLFによる思いやり育成プログラム Voices of Love and Freedom 図書文化社

【資料7】学級生活満足度尺度の事前・事後の結果

